

2019年2月

第101号

ぱれっと



(株)北日本ベストサポート
Tel. 018-883-1888

ヤング躍動

1月20日卓球の全日本選手権最終日、男子シングルスではベテラン水谷隼選手(29)が10度目の優勝を飾り、女子では伊藤美誠選手(18)がシングルス・ダブルス・混合ダブルスを史上初となる2年連続の三冠を達成した。シングルス決勝の相手は中学生の木原選手(14)、ヤング同士の戦い。男子で昨年の覇者張本選手(15)はまさかの準決勝で敗退したが、ヤングの活躍が目立った大会だった。

頭脳のゲームでは昨年将棋界に彗星のごとく登場し話題を独り占めにした藤井聡太(当時15歳)7段。昨年15歳6ヶ月で優勝した朝日杯オープン戦で今年も準決勝まで駒を進めており2連覇に向けて快進撃を続けている。

一方、囲碁界では今年は面白い年となりそうだ。日本棋院は1月5日「囲碁の日」に小学校4年生の仲邑菫(なかむらすみれ)さんが4月に10歳0ヶ月で史上最年少のプロ棋士となることを発表した。

これまでの最年少記録は9年前にプロ入りした藤沢里菜(20)女流本因坊で当時11歳6ヶ月であった。

日本の囲碁界は20年前までは国際戦で常勝していたが、最近では中国・韓国に大きく遅れを取っている。世界のトップ棋士は10代から20代前半が中心となっており若手の育成が急務となっていた。日本棋院では世界で活躍できる若手育成のため12月に「英才特別採用推薦棋士制度」を新設し、その第1号となったのが仲邑菫さんだ。

菫さんは父がプロ棋士の仲邑信也9段、叔母が石井茜3段、母が囲碁インストラクターと囲碁一家に生まれ、3歳で母から手ほどきを受け、人工知能(AI)を使った棋譜の検討や夏休みから12月までは母と韓国に渡りソウルで生活しながら韓国の囲碁道場と呼ばれる育成機関に通った。韓国語も覚え、昨年現地の小学校低学年チャンピオンとなった。

韓国では囲碁は小学生の習い事として定着し、約800ある教室に10万人超が通うという盛況ぶりとなっている。

菫さんは4月以降プロ棋士に交じってタイトル戦予選に挑む。

先日、日本の第一人者である井山裕太王座と公開対局した。結果は時間切れ引き分けとなったが、まだ9歳で立派に対局ができ将来が楽しみだ。1月23日には世界女流トップの韓国棋士崔精(チェジョン)9段と記念対局が予定されている。

本人は将来「世界一になる」ことが目標だ。小さな体に無限の可能性を秘め、大きな夢を追いかけプロとしての挑戦が始まる。日本を代表する棋士に立派に成長して欲しい。スポーツでも囲碁・将棋でも、その他の世界でも若いエネルギーが躍動する姿は周囲を明るくし勇気と希望と感動を与えてくれる。



日本企業の成長エンジン

元慶應義塾大学 名誉教授 村田 昭治

最善をつくせ、そして一流であれ

ビジネスの世界はデータあるいは IT 革命で情報主義になっている。それは大きな進歩で否定するものではない。ただ、その一方で人間だけが持っている人間業、勘というものの掘り下げが不足したり、軽んじられたりしてはいないだろうか。

商売には勘が必要だ。たとえば、この味付けはどこか変だなと玄人は感じるものだ。そのような、その道何十年の玄人の味が、いまぼけてしまっていないか。そんな勘を大切にしていないのではないか。その想いが年々強くなっている。

玄人を見直したいと思う。玄人には、達人といわれ『私の流儀』というものをもっておられる方がいる。私の流儀とは自分のやり方であるが、そのなかに誰もかなうものがない大変な超能力を発揮するものだ。

その流儀をもった人が年々いなくなってしまうことが、偽物を横行させる一因になっているとしたら寂しい。

技術革新が加速化されるなかで、社会は即戦力を求めた。現場ですぐ役立つ人間を欲する陰で、玄人が軽んじられていく風潮が生まれていったということもあろう。

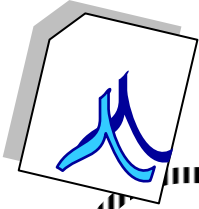
日本人の伝統の良さ、強さについて社内で吟味し、議論し、もっと自社の強みの強化を図ることを考えるべきではなかろうか。

いま、真のマーケティングが求められている。

それは、マーケティングの原点である親切さ、ハートフルな心づかい、そして目に見えないところでの志をもった研究・勉強、執念をもった開発への日常の熱い取り組みと練磨にあるだろう。

「最善をつくせ、そして一流であれ」これこそ経営の基本なのだ。

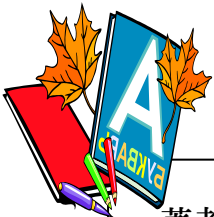
(「人を惹きつける経営」より)



新井 白石 (近世第一級の詩人、学者、異色の経世家)

1657年2月10日(明暦3年)	上総久留里(千葉県)藩士新井正済と妻千代子の子として江戸神田柳原に生まれる。
1677年(延宝5年)	久留里藩主土屋利直に仕えたが内紛により浪人。
1682年(天和2年)	大老堀田正俊に仕えたが次の正伸の代に辞去、浪人。独学で儒学を学び続けた。
1686年(貞享3年)	朱子学者木下純庵に入門。
1693年(元禄6年)	木下純庵の推薦により甲府侯徳川綱豊に仕えた。
1709年(元禄10年)	徳川綱吉の死により家宣(綱豊改名)が6代将軍となる。白石は側用人間部詮房と協力、家宣を補佐。
1711年	以降、将軍の政治顧問的立場から内政外交両面で大改革を主導。7代将軍家継の時代にかけて「金銀貨改良」「長崎貿易制限」「対朝鮮外交刷新」のほか「生類哀れみの令廃止」「賄賂請託の腐敗政治にメス」など『正徳の治』と呼ばれる改革を行った。 幕閣でも御用人でもない一介の旗本が将軍侍講として幕府の政治に関与した例を他に見ることができない。
1716年(享保元年)	紀州藩主であった徳川吉宗が第8代将軍に就き、白石失脚、公的政治から退いた。
1725年6月29日(享保10年)	死去 享年68歳。 官位 従五位下 筑後守、贈正四位

オススの BOOK



日本の『中国人』社会

著者 中島 恵 出版社 日経プレミアシリーズ

著者は1967年生まれ。北京大学、香港中文大学に留学。新聞記者を経てフリージャーナリスト。アジア各国ビジネス事情など執筆している。

現在、在日中国人は約73万人。多数の在日中国人に取材し日常生活や日本に住む動機、生活実態などを聞き出す。

中国人といっても画一的に論ずることは危険だ。ややもするとゴミ処理や大声での会話など傍若無人的な見方が多いが、中国人の多い地区に住まないという中国人もいる。中国社会は超競争社会。日本の自然や安全などに魅力を感じ定住をしている姿が見えてくる。



2019 年を賢く乗り切りましょう

平成から新しい時代が幕開けする節目の年に入り早 1 カ月が過ぎました。今年は経済効果が期待される一方で、法改正や値上げラッシュなど私達の生活に関わる変化が目白押しです。家計に影響を及ぼしそうな今年の「変化」をチェックしてみましょう。

【1月】

- 地震保険料の値上げ
- 休眠預金制度の開始
- 国際観光旅客税（出国税）の導入
- 改正相続法の順次施行
- 家庭用小麦粉の値上げ
- 読売新聞が 25 年ぶりの値上げ

【2月】

- 千円カットで知られる QB ハウスが値上げ
- 業務用ごま油・食品ごま製品の値上げ

【3月】

- アイスクリーム・冷凍食品・魚肉系の練り物類など食料品を各社が値上げ

【4月】

- 国民年金保険料の産前産後期間の免除（国民年金の第1号被保険者が出産の場合）
- 働き方改革関連法が段階的に施行
- 食塩・コーラなど清涼飲料の値上げ

【5月】

- 新元号に変わる

【7月】

- 相続時の仮払い制度施行

【10月】

- 消費税率10%に引き上げ・景気対策の導入

- 幼児教育・保育の無償化
- 楽天が携帯電話事業に参入

このように家計を直撃する値上げが相次ぎますが、最大の焦点は消費税増税です。消費税率は1989年に3%、97年に5%、2014年に8%と段階的に引き上げられ、ついに10%になります。過去の増税直前には駆け込み需要や買いだめが起き、その反動で消費が落ち込んだことを踏まえ、今回は手厚い景気対策が盛り込まれているので情報収集しましょう。

まず、酒類・外食を除く飲食料品と定期購読されている新聞を8%に据え置く軽減税率が導入されます。また、現金を使わないキャッシュレス決済での買い物に5%のポイントを還元するほか、低所得者や2歳児以下の子育て世帯にプレミアム付商品券が発行されます。さらに、2歳児以下は住民税非課税世帯、3~5歳児は原則全世帯を対象に幼児教育・保育の無償化が実施され、子育て層の負担は軽くなります。

特に、住宅と自動車はタイミングが気になるところですが、増税後に購入する場合、住宅は住宅ローン減税の控除期間延長やすまい給付金の拡充、自動車は毎年の自動車税の引き下げなどが見込まれているため、慌てて行動するのではなく慎重に検討しましょう。

今年は物価上昇に見合う生活感覚のアップデートを行う必要があるようです。



十和田湖冬物語



【編集後記】

大相撲初場所で白鵬を除き、横綱・大関陣が負け込み土俵が荒れている。

ただ一人日本人横綱「稀勢の里」(32)が「土俵人生において、一片の悔いもない」「本当にいろいろな人に支えられて、感謝の気持ちしかない」と引退を表明した。「努力」「一生懸命」に愚直なまでに相撲に取り組む姿勢には頭が下がる。

怪我に悩まされ不運でもあったが多くのファンは惜しめない拍手を送ることだろう。

秋田県出身、豪風関(39)も引退となった。ご苦労様。